

飯沼二郎の風土論

張 政 遠*

1 は じ め に

京都大学人文科学研究所の元教授・京都大学名誉教授である飯沼二郎（1918-2005）は、『農業革命論』『見えない人々』『日本農業の再発見』など多数の著書を残しているが、『風土と歴史』と題した新書の中で、従来の静態な風土論に対して、動態的風土論を唱えている。周知のように、和辻哲郎は東アジア（日本と中国などの湿潤地帯）の風土を「モンスーン型」としているが、乾燥地帯の西南アジアの風土についてほとんど語っていない。

『風土と歴史』の冒頭にバグダードでの見聞が紹介されている。飯沼には、このような疑問を抱いている。「数千年前、世界でもっとも裕福で、もっとも産業の発達したこの地方が、なぜ、こんにち、このように貧困で、産業の発達の遅れた地方として、世界の片すみにとりのこされてしまったのか。」¹⁾ 昨今、グローバルサウスという議論が注目を集めているが、飯沼は次のように問い直している。「二〇世紀のこんにち、北は産業が発達して富裕であるのにたいして、南は産業が未発達で貧困だという、いわゆる「南北」のアンバランスをいかにして是正するかが、重要な課題とされている。ところが、いまから千年以上まえには、ちょうど「南北」のアンバランスが、こんにちとは逆転していたのである。千年のあいだに、どうして、「南北」問題が、このように逆転してしまったのか。」²⁾ 結局、南北のアンバランスという事実は、風土によって決定されたのだろうか。

飯沼は「わたしの風土にたいする関心は、西南アジアの旅行にはじまったものではない。否、風土にたいする関心こそが、逆に、わたしを西南アジアの旅行にかりたてたのであった。しかし、西南アジアの風土をみるまでは、わたしの風土論は、いわば「机上の空論」にすぎなかった」³⁾ と述べている。本稿では、和辻哲郎（1889-1960）・洪耀勳（1918-2005）・オギュスタン・

* ちょう せいえん 東京大学

ベルク（1942-）、そして飯沼の風土論を述べ、新風土論の可能性を検討したい。

2 風土と風土学

周知のように、和辻哲郎（1889-1960）は『風土』の中で、風土の三つの類型、すなわち「モンスーン型」「牧場型」「砂漠型」を提示している。モンスーンとはアラビア語で *mausium*（季節）のことをさしており、インド・中国・日本もモンスーン型の風土に属しているが、和辻が着眼しているのは、夏と冬とで風向きが変わる季節風よりも、夏から秋にかけて熱帯・亜熱帯の海洋上で発生する台風である。和辻は「台風の性格」という章の中で、こう書いている。

台風は稲の花を吹くことによって人間の生活を脅やかす。だから台風が季節的でありつつ突発的であるという二重性格は、人間の生活自身の二重性格にほかならぬ。豊富な湿気が人間に食物を恵むとともに、同時に暴風や洪水として人間を脅やかすというモンスーンの風土の、従って人間の受容的・忍従的な存在の仕方の二重性格の上に、ここにはさらに熱帯的・寒帯的・季節的・突発的というごとき特殊な二重性格が加わってくるのである。⁴⁾

台風は米などの農作物について多くの災害をもたらしているが、ある程度予想できるから、相互扶助の倫理的な関係が築き上げられていると和辻は論じている。この意味においては、地理的・気候的条件が似ている日本と台湾は、風土的・文化的にも似ていると考えられる。和辻の影響を受けた一人として、東京帝国大学で哲学を学び、のちに台北帝国大学で教鞭を執った洪耀勳である。洪は、「風土文化観——台湾風土との連関に於て」と題した論文を発表し、次のように述べている。

「モンスーン」なる風土の類型の下に営為された東方社会の生活様式は、等しく「東方的原理」に立つところの東方諸民族の自己了解の型であるのである。而て、この類型の系と見るべき「タイフーン」地域にある内地と台湾は、更に著しき相似性にあるといわざるを得ないから、そこに於ける我々の存在の仕方は大なる親近性の存することは勿論のこと、その上我々の意識的努力に由る歴史生の接近は既に緊密の度を加えて来ている。⁵⁾

台風といえば、気候（climate）の話につながっているが、『風土』の英訳のタイトルは、『Climate』となっている。無論、風土と気候は同義語というわけではない。和辻が考えた風土は、英語の climate よりも、ドイツ語の Klima である。たとえば、ヘルデルの Geist des Klima を「風土の精神」と、また Klimatologie aller menschlichen Denk- und Empfindungskräfte を

「人の思惟力・感受力全体の風土学」と和辻は訳している⁶⁾。風土を英語の climate と訳せば、風土の精神という意味が分からなくなり、気候と同じ意味になってしまう恐れがある。

フランス出身の人文地理学者のオーギュスタン・ベルクは、この問題を避けるために、「風土」をフランス語の climat ではなく、milieu と訳している。ここでは議論の出発点として、ベルクの立場の一例を紹介しておこう。

Milieu あるいは「風土」、この二つの言葉はしばしば「自然環境」の意味で用いられるが、それにもかかわらず、そこには文化的な意味合いが含まれている。この二面性から明らかになるのは、具体的に与えられたひとつの風土^{ミリュウ}の実際面においては、自然と社会が不可分だ、ということである。けれども両者が不可分となるのは、この実際面という範囲内においてのみであり、そしてこの範囲は、その風土^{ミリュウ}のなかでしか十分に価値を持つことはない。したがってありとあらゆるものが、自然と社会の集合体という全体を定義し、またその全体（風土）が各々の要素に付与する意味を、定義することになる。⁷⁾

『風土の日本』（原題：Le sauvage et l'artifice. Les Japonais devant la nature）において、ベルクは三つの自明の命題（あるいは三つの公理）を挙げている。つまり、風土は自然的であると同時に文化的である。風土は主観的であると同時に客観的である。風土は集団的であると同時に個人的である⁸⁾。さらに重要なことに、ベルクは「風土学（mésologie）」という理論的枠組みも提案している⁹⁾。「Mésol-」は、メソポタミア（2つの川の間）のように、「間」という意味である。つまり、主観的かつ客観的風土（milieu）は、主体と客体の無差別の場所（lieu）と、主観的かつ客観的のどちらかの空間（espace）との「間」にあるのである。言い換えれば、風土というのは、「本質的に場所（lieux）と広がり（étendues）の「間」、すなわち、mi-lieu であり、mi-étendue なのである。」¹⁰⁾

ベルクは和辻の「風土」という概念から「風土学」を生み出しているだけではなく、「風景論」まで持論を展開している。「風景（paysage）」に関しては、二つの方向から考えることができる。つまり、風景は単一である（発生的）場合があるが、複数（複製的）でもある。単一の風景が複数になることは、「空間構成」として理解することができる。ベルクによれば、「古ギリシャ語の動詞 χωρειν は文字どおり空間的意味（「場所を譲る、退く、移動する、前進する、侵入する、含む」）の他に、「理解する、思考によって把握する」という意味を持つ。そして派生語の形容詞 χωρητικός は「理解できる」の意を持つ。したがって空間構成（範囲性）（chorésie）はここでは、語源的な意味の「前進するという行為（χωρησις）と、ある言語、ないしより一般的にはあるコード圏の領域的拡張を同時に意味する。」¹¹⁾ 日本では、「水田」を「原風景」として考えられているが、この風景がさまざまな場所で再現されたものである。「たとえば日本

の社会は北海道に稲田を作ったが、これはある意味で日本の風景をアイヌの島に再現することであった。この複製は、歴史的には帝国主義と、ある（土着の）社会の（外来の）社会による排除を前提とした。そこにはいわば場所による有効性が働いている。」¹²⁾

ベルクにとって、「空間構成」は居住域 (écoumène) を非居住域 (érème または anékoumène) にまで拡張することを意味している。ギリシャ語では非居住域を *ἐρημος*, つまり野生の地・不毛の地 (désert) というが、和辻の「風土」三類型から考えると、「モンスーン型」や「牧場型」は居住域であり、「砂漠型」は非居住域であるといえよう。ベルクはまた、日本ならではの「空間構成」について論じている。つまり、人が住んでいる「里」は、人が住んでいない「山」と「海」の間にあるのである。また、山と里の間には「山の辺」という境界があり、里と海との間には「磯」という境界がある。「…日本の場合は、双方の領域間に恒常的な交流があるとされる。実際日本の神々は、非居住域から居住域へ、「森」から「里」へと移り変わる。春には、「山の神」が人里の方へ下り、そこで「田の神」となり、秋になると反対方向の移動を行う。非居住域と居住域をめぐるこの神々の「旅」は、自然と文化の周期的な関係を象徴することになる。その定期的交替は、春と秋の、旅する神々の「送り」と「迎え」の祭日で示されるのである。」¹³⁾ この恒常的な交流について、たとえば、柳田國男は『年中行事覚書』の中で次のように書いている。

田の神が春は山から降りて田を守り、冬に入ってから、再び山に登って山の神になるということは、もう本当にそうだと思わない人までが、全国にわたって今でも皆記憶している。町に住む者は、毎日いつでもほしい時に、珍しい食物が得られるので、節日というものの印象はうすいのだが、農村ではこれが一つの良い記念であった。その日にならなければ決して作らないという餅や団子、それに伴ったいろいろの行事の、他の日にはついぞ見られぬものがいろいろある。¹⁴⁾

ベルクによれば、自然と文化は「空間」という指示対象からみれば非居住域と居住域になるが、「時間」という指示対象からみれば「ハレ」と「ケ」になる。「晴れの日」に特別な食べものを食べるが、「褻 (け)」というのは軽蔑的なものではなく、日常的なもの、普通のもの、当たり前のものを指している。

私は、「風土は気候ではない」というベルクの立場に同意している。前者は文化や歴史に関するもので、後者は外部の環境条件に関するものだからである。しかし、和辻の「風土」もベルクの「風土論」も、日本が「瑞穂の国」であることを前提としている。じっさい、日本の多くの地域が稲作に適していない。たとえば、山間部では棚田の費用対効果が低く、火山灰や珊瑚石灰質の土壌を持つ島では保水力が低い、などの課題がある。『雪国の春』では、柳田國男

が東北地方は日本の米どころであるとしているが、赤坂憲雄によれば、これが「幻像としての常民」にはかならない。「下北の地には、稲作の歴史がほとんどなかったのである。柳田の懐かしい筆使いには、ひとつの詐術が隠されているのではないか。軒まで届くほどに深い雪景色の底に埋もれた、稲を作る常民たちの東北とは、ひとかけらの幻像にすぎないのではないか。」¹⁵⁾ 東北沿岸では、ヤマセによる冷害に加えて、津波によって田んぼに大量の塩分が残ったり、福島原発事故による核汚染などの天災・人禍によって、田んぼの耕作ができなくなったっている。北海道では気温が低く、稲作に適した土地ではなかったが、温暖化や品種改良により、田んぼの広さや生産量では新潟県に次ぐ日本の一大産地となっている。¹⁶⁾

3 動態的風土論

北海道の風土をよく知っているベルクは、「福岡賞」受賞に際して次のように述べている。

私がかつて札幌に住み、明治期の北海道開拓をテーマの一つにして研究しました。その時代、北海道では科学的には不可能とされていた稲作が、農民たちの米作りへの強い意志や努力、そして自然の突然変異で寒さに強い品種米が生まれたことで可能になりました。その米は北海道の外で育てるとやや風味に欠けるため、ただの雑草として処分されたでしょう。しかし、北海道ではこの稲作の成功が契機となり、北海道の風土性の中心に位置づけられます。¹⁷⁾

「気候変動（climate change）」は米の生産に大きな影響を与えているが、そもそも気候変動は自然なプロセスであり、地球規模で進んでいるが、比較的遅い。何百万年もの間、私たちの世界は今よりも暖かくなったり寒くなったりした。一方、私は「風土変動（fudo change）」という用語を唱えたい。風土はずっと変化しないものではなく、人為的なプロセスによって、地域規模でしかも比較的速いスピードで変化していく。たとえば近代化以来、主に化石燃料の燃焼によって温室効果ガスが排出され、人間活動によるかつてない急激な温暖化が起きている。

多くの人々は気候変動とは主に気温の上昇を意味すると考えているが、異常気象の結果として激しい干ばつ、水不足、森林火災、海面上昇、洪水、氷床融解、台風多発、生物多様性の減少などが挙げられる。また、気候格差という問題もあり、グローバルサウスの国々は気候変動の影響を受けやすくなっている。「南北アンバランス」という事実は、やはり風土によって決定されているのだろうか。この宿命論に異論を唱えたのは飯沼二郎である。飯沼は京大農学部卒業後、国会図書館や農業技術研究所を経て京都大学に移り、人文科学研究所助教授のち教授となった。『風土と歴史』の中で、バグダードでのエピソードが書かれているが、飯沼と同行

者との次の問答が興味深い。

「飯沼さん、風土によって、生産関係や生産力が決定されるとすれば、西南アジアのような、こういう風土に生まれたものは、宿命的に、貧困からのがれられないことになりますね。」

「いや、宿命論ではないですよ。もし、風土によって、すべてが宿命的に決定されるものなら、だいいち、「南北」問題の逆転ということも、また、ありえないはずではないですか。」

メソポタミアには古代文明を育んだ風土があるにもかかわらず、貧困で産業の発達の遅れた地方になってしまった。飯沼によれば、従来の静態論的な風土論ではこの変化を解釈することはできず、動態論的な風土論なら解釈可能だという。もちろん、その背後には、和辻への批判があるのである。以下、飯沼の言葉を引用しておこう。

和辻哲郎氏の名著『風土』をはじめ、いままでの風土論は、とにかく、風土の影響を静態的にとらえていたようにおもわれる。たとえば、ヨーロッパのような、自然の変化が規則的で、あまり突発的な変化が起らないようなところでは、科学が発達するという。おそらく、それは、そのとおりであろう。しかし、それならば、なぜ、中世には、ヨーロッパで科学がおとろえ、かえって、苛酷な自然環境である西南アジアで、科学が発達しえたのか。[中略] たしかに、風土というものは、人間の力でほとんど変えることのできない自然のワクではあるが、しかし、それをどう利用するかは、人の側の主体的な条件（端的にいうならば、資本と労働の在り方）のちがいによって変ってくる。千年のあいだにおける「南北」問題の逆転ということは、まさに、このような、人間の側の主体的な条件の変化を意味しているのではないだろうか。¹⁸⁾

豊かな居住域が非居住域になった場合もあれば、貧しい非居住域が立派な居住域になった場合もある。たとえば、アメリカ合衆国に「開拓」という過去があり、「アメリカ合衆国の西部は、一九世紀前半までは、ほとんど不毛の地にすぎなかった。しかるに、アメリカにおける資本と労働の在り方が変化するにしたがって、穀物にたいする需要の増加、農業機械の発明、輸送手段の発達などは、西部を穀物の一大生産地に変化せしめたのであった。」¹⁹⁾ 飯沼はこう続いている。「このようなわたしの考え方は、いいかえれば、変転する歴史の根底にあって、つねに、それに一定のワクをはめている風土の存在を、あきらかにしようすることでもある。そのばあい、ひとつの文化と風土との関係のみならず、さらに、ことなった風土のうえに生い育った

文化相互のあいだの対立と融合ということが、重要な課題となってくるであろう。」²⁰⁾

飯沼は、西南アジアの風土をみるまでは、自分の風土論は「机上の空論」にすぎなかったという。具体的には、「湿潤地帯＝日本と、あまりにもちがった西南アジアの乾燥地帯をみたとき、そのことが、はじめて、わたしには、わかったのである」²¹⁾と飯沼は確信している。ここで重要なのは、湿潤地帯と乾燥地帯との区分である。農学者である飯沼は、農業技術体系について研究を行い、世界における農業技術体系について次のように分けている。

表3 世界における農業技術体系の区分（飯沼）²²⁾

	乾燥地帯	湿潤地帯	
	↓	↓	
	保水農業	除草農業	
より乾燥的 →	休閒保水農業	休閒除草農業	→ (休閒農業)
より湿潤的 →	中耕保水農業	中耕除草農業	→ (中耕農業)

飯沼の考えを次のように要約することができよう。「表3は、世界の農業を、乾燥地帯の農業と湿潤地帯の農業、すなわち保水農業と除草農業とにわけたものであるが、これを、休閒と中耕という別の視点にもとづいて、さらに、休閒農業と中耕農業とに区分しなおすこともできるであろう。」農業の条件を大きくかえることになるから、灌漑地は除いているが、重要なのは、乾燥地帯はより乾燥的になったり、より湿潤的になったりする場合がある。湿潤地帯もまたより乾燥的になったり、より湿潤的になったりする場合がある。農業は、最初から湿潤地帯から発展したのではなく、乾燥地帯から発展した。飯沼の分析は次の通りである。

一万年におよぶ犁農耕文化は、乾燥地帯から湿潤地帯へ、すなわち保水農業から除草農業への発展であった。なぜか。先にも述べたように、おそらく、人類が、はじめて穀物と大家畜と犁とを手にしたとき、植生の旺盛な大森林におおわれた湿潤地帯よりも、植生の劣る大地の露出した乾燥地帯のほうが、はるかに手におえる風土であったのであろう。人類は、まず、熱帯の湿潤地帯において、狩猟・採集経済から鋤農耕文化にうつり、ついで、温帯の乾燥地帯において犁農耕文化にうつり、さらに、温帯の湿潤地帯へと移行していったのである。²³⁾

和辻もベルクも、風土と歴史について言及しているが、農業技術体系の観点から風土と歴史との関係を考えていない。飯沼の動態的風土論は、今後の新しい風土論に大きなヒントを示していると思われる。

風土論は静態的ではなく、動態的でなければならない。そして、風土は概念でもなければ、机上の空論でもない飯沼の考察は、人文科学研究所のレガシーにかかわっているように思われ

る。飯沼は次の名前が挙げている。

わたしの研究は、敗戦とともに、はじまったといっている。〔中略〕歴史における風土の重要性を、わたしに示してくださったのは、〔京都帝国大学農業部の〕大槻正男先生であった。おそらく、わたしの足があまりにも地についていないことを、心配されたからであっただろう。以来、二十数年間、わたしは、このテーマをおいつづけることになったのである。その後、風土を、それにたいする人間の主体的なかかわりにおいてとらえるべきことを示してくださったのは、〔京都帝国大学人文科学研究所教授の〕柏祐賢先生であった。これによって、わたしは、風土決定論から抜け出す道を見出すことができた。

このほか、わたしは、おおくのすぐれた師友にめぐまれたことを、ふかく感謝している。とくに、今西錦司先生の主宰された京大人文科学研究所における共同研究（現在は梅棹忠夫氏が引きついでおられる）は、日本と西欧しか、かんがえに入れていなかったわたしの視野を、世界的規模にまで拡大してくださった。この共同研究の構成メンバーのおおくが、じっさいに自分の身でみ、足で歩いてきた、アジアやアフリカや南太平洋についての知識は、わたしにとって、このうえなく貴重なものであった。²⁴⁾

京都大学人文科学研究所は、東方文化学院京都研究所（のち東方文化研究所に改称）と、ドイツ文化研究所（のち西洋文化研究所に改称）と、京都大学人文科学研究所の3研究所が1949年に統合し現在にいたっているが、古典文献の会読、フィールド調査、相互討論を通じて考察を深める共同研究により、多民族・多文化間の調和ある共生に資する知見を発信しているという²⁵⁾。この人文科学研究所のレガシーは、「京都の風土」として理解することができよう。

4 お わ り に

以上、飯沼の動態的風土論を紹介したが、「京都の風土」とは一体何をさしているか。ベルクは「町家」に注目している。「実際、茶室建築は隠遁の隠喩で、それは京都の都市家屋である町家を筆頭に、日本家屋の建築に何がしかの影響をおよぼしたのだった。」²⁶⁾ 京都の家屋、そして日本の家屋は冬向けよりも夏向けに設計された。この隠遁思想が『桃花源記』に遡ることができる。「隠遁」から「殺風景」へ、これが京都における「風土変動」だと言っても過言ではない。町家は猛暑と大型台風など極端な気象状況に対応できなくなり、駅ビル・タワー・高層マンションなどの巨大建造物が京都の景観を壊している。

ベルクは「殺風景」だけではなく、「趣き」も言及している。東日本大震災の一年後、ベルクは東北大学で「災害、世俗性、物の哀れ：これから日本の風土性は」と題した基調講演を

行った。野家啓一は次のように回顧している。

シンポジウムの基調講演には、フランスからオギュスタン・ベルクさんをお招きした。ベルクさんは和辻哲郎の風土論を独自の観点から発展させた『風土の日本』（ちくま学芸文庫）などの著作がある人文地理学者で、一〇年ほど前には宮城大学教授として仙台に居住されたこともあり、東北との縁は深い。震災直後の六月にも来日され、宮城県山元町の津波による被災現場を訪ねられた。

そのときの体験を基にしたベルクさんの講演の中で、最も印象に残ったのは、「殺風景」と「趣き」という二つのキーワードであった。殺風景とは文字通り「風景を殺す」ことであり、趣きとはおのずから「心が動いてゆく方向」、すなわち歴史的に培われてきた自然との絆を感受することにはかならない。それからすれば、高度成長期の日本列島改造論に見られるような無定見な国土開発は、風景を殺して「殺風景化」し、同時に自然との歴史的な絆をも断ち切って「趣き」を消滅させてきたのである。地震と津波という天災による被害を著しく増幅させたのも、そうした風土性の喪失に一因がある。それゆえ、今後の復旧と復興は、人間の生存に不可欠の風土性を再発見し、その趣きを再生させることから始めねばならない。²⁷⁾

「気候変動」は人類が直面する最大の脅威ではあるが、災害・戦争によって多くの人々の居住域が非居住域となってしまう「風土変動」も、極めて深刻な問題だと言わざるを得ない。風土は常に変わらないものではなく、きわめて傷付きやすいものである。新しい風土論は、「風土」という概念と「風土学」という理論をひたすら分析するのみならず、さまざまな現場で「風土変動」の諸課題と解決策を検討しなければならないと私は考えている。

注

- 1) 飯沼二郎『風土と歴史』（岩波新書、1979年）6頁。
- 2) 同上、4頁。
- 3) 同上、9頁。
- 4) 和辻哲郎『風土』（岩波文庫、1979年）162-163頁。強調体は原文。
- 5) 洪耀勳「風土文化観——台湾風土との連関に於て」『臺灣時報』1936年7月、23頁。
- 6) 和辻哲郎『風土』251頁。
- 7) ベルク『風土の日本』（ちくま学文館、1992年）、4頁。
- 8) 同上、183-184頁。
- 9) 同上、206-207頁。

- 10) 同上, 368 頁。
- 11) Ibid. p. 203
- 12) Ibid. p. 200
- 13) Ibid. pp. 85-86.
- 14) 柳田國男『柳田國男全集』（ちくま文庫, 1990）第 16 卷, 27 頁。
- 15) 赤坂憲雄『東北学／忘れられた東北』（講談社学術文庫, 2009 年）19-20 頁。
- 16) <https://www.hokkaido-kome.gr.jp/about/komedokoro/>
- 17) <https://fukuoka-prize.org/files/download/LibraryReports/c5ba74eb-ccd8-4c29-a991-c044273525f4/file/>
- 18) 飯沼二郎『風土と歴史』, 7-8 頁。
- 19) 飯沼二郎『風土と歴史』, 8 頁。
- 20) 飯沼二郎『風土と歴史』, 9 頁。
- 21) 飯沼二郎『風土と歴史』, 9 頁。
- 22) 飯沼二郎『風土と歴史』, 52 頁。
- 23) 飯沼二郎『風土と歴史』, 52-53 頁。
- 24) 飯沼二郎『風土と歴史』, 212-213 頁。
- 25) <https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/aboutus.html>
- 26) ベルク『理想の住まい：隠遁から殺風景へ』（京都大学学術出版会, 2017）, 233 頁。
- 27) 野家啓一『はざまの哲学』（青土社, 2018 年）, 300 頁。

要 旨

京都大学人文科学研究所の元教授・京都大学名誉教授である飯沼二郎（1918-2005）は、『農業革命論』『見えない人々』『日本農業の再発見』など多数の著書を残しているが、『風土と歴史』と題した新書の中で、従来の静態な風土論に対して、動態的風土論を唱えている。周知のように、和辻哲郎は東アジア（日本と中国などの湿潤地帯）の風土を「モンスーン型」としているが、乾燥地帯の西南アジアの風土についてほとんど語っていない。『風土と歴史』の冒頭にバグダードでの見聞が紹介されている。飯沼には、数千年前、世界でもっとも裕福で、もっとも産業の発達したこの地方が、なぜ貧困で、産業の発達の遅れた地方として、世界の片すみにとりのこされてしまったのか、という疑問を抱いている。昨今、グローバルサウスという議論が注目を集めているが、結局、南北のアンバランスという事実は、風土によって決定されたのだろうか。飯沼は「わたしの風土にたいする関心は、西南アジアの旅行にはじまったものではない。否、風土にたいする関心こそが、逆に、わたしを西南アジアの旅行にかりたてたのであった。しかし、西南アジアの風土をみるまでは、わたしの風土論は、いわば「机上の空論」にすぎなかった」と述べている。本稿では、和辻哲郎（1889-1960）・洪耀勳（1918-2005）・オギュスタン・ベルク（1942-）、そして飯沼の風土論を述べ、新風土論の可能性を検討したい。

キーワード：飯沼二郎、和辻哲郎、洪耀勳、オギュスタン・ベルク、風土

Abstract

Linuma Jirō (1918-2005) was a professor at the Institute for Research in Humanities, Kyoto University. In his book *Fūdo and History*, he advocates a dynamic theory of *fūdo* in contrast to the static theory of *fūdo*. As is well known, Watsuji Tetsurō explained the *fūdo* of East Asia in details, but he did not mention the *fūdo* of Southwest Asia. At the beginning of *Fūdo and History*, Linuma introduces his observations in Baghdad. Linuma wonders why this region, which was the wealthiest and most industrially developed in the world thousands of years ago, has been left behind in a corner of the world as a poor, underdeveloped region. Recently, the concept of the “global south” has been attracting attention, but in the end, is the imbalance between the north and south determined by *fūdo*? Linuma says, “My interest in climate did not begin with my travels in South-West Asia. On the contrary, it was my interest in climate that spurred me to travel in South-West Asia. However, until I saw the climate of South-West Asia, my theory of climate was, so to speak, nothing more than an armchair theory.” In this paper, I would like to discuss the theories of *fūdo* by Linuma, Watsuji (1889-1960), Hung Yao-hsün (1918-2005) and Augustin Berque (1942-), and consider the possibility of a new theory of *fūdo*.

Keywords: Linuma Jirō, Watsuji Tetsurō, Hung Yao-hsün, Augustin Berque, *fūdo*